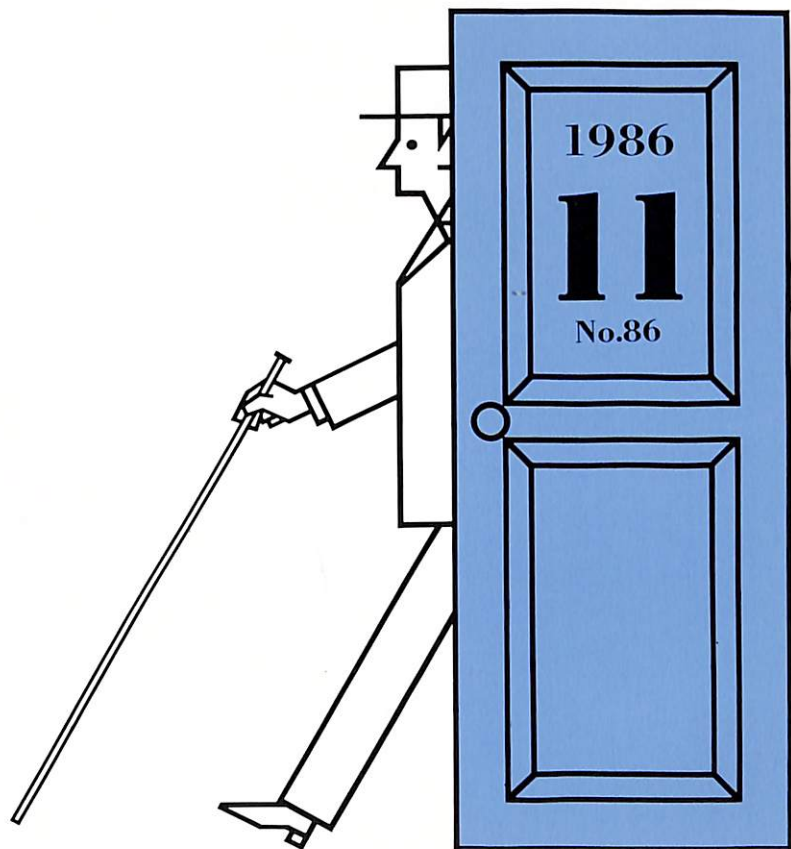


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和六一年一〇月一五日 SSK通巻第一四九八号 (毎月六回、5の日、0の日発行)

視	覚
障	害

その研究と情報

特集*女として妻として母として



ISSN 0385-7476

SSK

岩波新書——好評の既刊より

光に向って咲け

栗津キヨ著

斎藤百合の生涯―盲女性のためにもっと教育の機会を主張し、その実現に奔走した先覚者の生涯を、その教え子が描く感動の書。

定価四八〇円

歌い来しかた

近藤芳美著

わが短歌戦後史―アララギの歌人として出発した著者が自らの短歌を引きつつ語る戦後史。激動の時代を生きた一知識人の内面史。

定価四八〇円

農民哀史から六十年

渋谷定輔著

『農民哀史』の著者が、埼玉県南畑小作争議を中心に、激動の八十年の体験を情熱をこめて語った大正期から現代に至る民衆の実践報告。

定価四八〇円

世界経済をどう見るか

宮崎義一著

世界を先進国、産油国、非産油途上国、共産圏の四グループに分けて貿易・金融のメカニズムを大胆に描き出し、将来を展望する。

定価五三〇円

江戸の旅

今野信雄著

街道や宿場の発達史をたどりながら、大名行列から庶民の旅まで、江戸時代を中心に紀行文・日記などの資料を使って旅の世相を描く。

定価四八〇円

古語雑談

佐竹昭広著

古語の表記と読みと意味をめぐって、先学の苦闘やその成果を語り、さらに著者独自の新知見を加えて語る珠玉のエッセイ一四六篇。

定価四八〇円

囲碁の世界

中山典之著

囲碁界の講談師、中山五段が、古今東西の勝負、芸人問答ドラマを通して、囲碁の魅力を縦横に語る。名調子が囲碁の世界にひきつける。

定価四八〇円

プロ野球審判の眼

島秀之助著

元セ・リーグ審判部長が四十三年間の審判生活を回想し、名試合・珍プレー、苦心や失敗談を語る。興味深い100問100答も収録する。

定価四八〇円

目 次

1986年 11月 №86

2 ページ評論	栗津 キヨ	2
特集 女として妻として母として		
「のぞみ5歳」のしあわせ	澗 玲子	5
きれいになりたい人この指とまれ!	赤沢 典子	8
育てながら育つ母親として	梅尾 朱美	11
恋とお酒は女の生きがい	逢坂 悦子	13
子育て1年半の提言	広沢 里枝	15
気負いや無理はやめて楽しい家庭を	山縣 文	18
彼とデュエットでこもれ日のように	金子 貴恵	20
スーパー・レディーになれなかった「わたし」	後藤 桃子	23
この人と語る		
自立できる女に	田代 姫代・鈴木 文子	26
ボランティア西・東		
奉仕のデパート社活研		43
自叙伝による近代の盲人像 第3回	谷合 侑	47
インフォメーション・コーナー		57
編集後記		68



盲女性は自信とほこりを 持って

東京都 栗津 キヨ

5月下旬、民芸上演の「人形の家」を見に行った。この芝居は、1879年にノールウェーの作家ヘンリック・イブセンによって書かれ、当時のヨーロッパに大きな波紋を起こした。その後長い間、世界的に婦人解放運動の先駆けとなった作品だと言われていた。しかし、イブセン自身は「これは女性解放論などではなく、人間の生き方を追究したものだ」と語っており、現在ではもはや歴史上の社会劇ではなく、現代の家庭劇として見直されている。

私には文学的評価などはできないが、そこに描かれている「女性の自我の確立」とでも言おうか、真の独立とは何かを考えさせてくれる芝居だった。あまりにも有名な作品なので、粗筋の紹介は省かせていただくが、家出した女主人公ノーラが見付ける女のしあわせが何であるのか、どう生きるのかは分からないままである。ただイブセンは、ノーラの友リンデン夫人に、「人間が自分のためにだけ働くなんてむなしい」と言わせている。

今年から日本でも、職場の男女差別はなくなり、すべて平等に扱われることになった。もちろん責任を果せる女性には権利もチャンスも与えてほしい。けれども、権利には義務がついて回るものだから、すべての女性が男性と同じように働くとしたら、必ず無理が生じ、そのしわよせが家庭に及ぶだろう。男性に負けたくない、男性に追い付こうという努力は無益だとは思わないが、そのために女性本来の使命がおろそかにされるのではないかと不安になる。

一時「お茶汲みストライキ」という言葉がはやったものだった。お茶は女がつぐものと決めるのはおかしいが、お茶を汲むことがど

うして女性の価値を下げることになるのだろう。職場を暖かくするというほこりを持って、お茶を汲むこともできるはずである。

最近サラリーマンの家庭では、主婦の権威が上がって、「亭主はシリをたたかれている」と言われ、そういう妻は教育ママであるようだ。私はこれも、女性の独立とか、地位の向上とか言えるものとは思わない。彼女たちは、夫や子どもを自分の冠とし、飾り物にしている。結局は薦かずらのような生き方ではないか。

一般に女性を紹介するとき、「何々社長婦人」、「〇〇教授婦人」と言い、ときには父親や息子の名前まで引き合いに出す。彼女自身のフルネームを紹介されることはほとんどない。しっかりと自分の使命に生きている女性なら、夫の出世はさほど問題にはなるまい。それより夫や息子が好きな仕事に打ち込めるように、手助けすることに生きがいを見いだすであろう。

私は、家庭にいる主婦と、その立場にからむ税金のことについて疑問を持っている。「ばかげたこと」と笑われるかもしれないが、職業を持たない妻は税金を納めていないから、夫の扶養家族だというのはおかしい。税金は、夫婦二人の名前で納めるようにすべきだ。それが無理なら、夫は生活必要経費として、家事労働の俸給を妻に支払い、妻はその中から税を納めればいい。家事、育児に携わる者を、働いていないと決めつけてはならない。

最後に、私たち盲女性は何かと人の援助に頼ることが多い。それはそれとして、自分の立場をいつもしっかりと守っていたい。職業人として、妻として、母としてカタイジをはるのではなく、自信とほこりを持って生きていきたいと思う。目のない者が、目のある社会で生きていくのは難しい。それでも暖かさと明るさは持ち続けたいものだ。イプセンのノーラも、きっと自分の意志でもとの家庭にもどることだろう。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

編集後記

「２ページ評論」の筆者、栗津キヨさんは、このほど岩波書店から斎藤百合の生涯を描いた「光に向かって咲け」（岩波書店広告参照）を著わした方です。この本をお読みになった方は、当時の盲女性の置かれた立場と、今回の特集の筆者たちが自ら切り開いている人生との間に、大きな差異のあることを痛感されたことと思います。今では、ごく普通に結婚し、ごく普通に母となり、自らの決断で離婚しています。たくましい彼女らの主張は、熟年ぞろいの編集委員が当初意図したものとはかなり違ったようです。今回の筆者よりさらに若い世代では、もっと「参加と平等」が進むことと期待されます。そのころには、今ではまだ少数派の晴眼男性との結婚がふえていることでしょう。つい20年ほど前、パーキンス盲学校の当時の校長、ウォーターハウス氏が来日したおり、氏の夫人が全盲であることが話題になり、氏から「なぜそれが話題になるのか」と逆に不思議がられたことがありましたが、やがて日本でも、そんな考え方が普通になっていくものと思われます。（田中徹二）

視 覚 障 害 1986年11月 №86
年間購読料 3,000 円（送料とも）

発行日 1986年11月1日

編集人（連絡先）

日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒160 東京都新宿区高田馬場1丁目
23番4号 日本点字図書館内

電話（03）200-1130

振替口座 東京 6-16103

発行人 身体障害者団体定期刊行物協会

〒157 東京都世田谷区砧6-26-21

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13
電 話（624）6111（代表）

協賛団体 日本点字図書館